

アルパケーロたち：中央アンデス高地、ペルーでアルパカと共に生きる人々

佃 麻美

標高 4800m。森林限界はとうに超え、苔のような這い蹲った草が地面を覆っている。遮るもののない高原は驚くほどなだらかで広い。振り上げば万年雪を被った山（写真 1）。その雪解け水が乾季にもこの辺りを比較的湿潤に保ってくれる。日差しはきつく、ここで暮らす人々の頬は単に黒いというよりも赤黒い。日が陰ると一転、温度は急激に下がり、氷点下にさえなる。雨季に降るのは雨ではなく、みぞれや雪、大粒の雹ばかり。



写真 1 標高 4800m

私がお世話になっている家族は、ここで 400 頭前後のアルパカとおよそ 60 頭のヒツジを飼っている。現在ではアルパカがかれらの主な収入源である。アルパカの毛は古来その良質さゆえに織物の原料として珍重されてきたし、近年では世界でも評価が高い。アルパカのセーターなど日本でも目にされたことがおありかもしれない。ヒツジの一種とアルパカを紹介しているのを見かけることがたまにあるが、アルパカはラクダ科である。
ここでの一日は放牧に終始する（写真 2）。メスの群れを放牧するのは 65 歳の女性。私は毎日それに付いていく。朝、まだ家の前に座り込んでいるアルパカたちに彼女が口笛を吹きながら近づいていくと、驚くほど容易に群れは動き出す。私が右往左往して追い立ててもちっともうまくいかない。



写真2 放牧

放牧とはでたらめにあちらこちらを歩き回るわけではない。いくつかのおおよそ決まったルートの中から、草地の状態などに応じてその日のルートが選択される。アルパカたちは彼女に従って肅々とその日の放牧地に出かけていくが、中には集団から離れていくやつも少数ながらいるものだ。すると彼女は私に、それを群れに追い戻せと指示を出す。脚の方までもこもこと毛に覆われているアルパカはそこまで俊敏そうには見えないが、さすがに人間の私が走って追いかけて捕まるほどとろくはない。群れとは逆側から近づいて追い立てるのだが、必ずしも思った通りには動いてくれない。特に高地は空気が薄い。生まれたばかりの仔はキツネの獲物になりやすいが、このときばかりは「そんなに勝手に歩きたいならキツネに喰われてしまえばいい！」とぜはぜは息を切らしながら思う。犬は飼われているが、こんなときには全く役に立たない。もともと牧羊犬のような役割は期待されていないのだ。放牧中も、飼い主のまわりを歩いているか、のんきに寝ている（写真3）。たまにアルパカを威嚇して、逆に威嚇され返される（写真4）。犬の役割は、夜、天敵のキツネを追っ払うことである。



写真3 のんきに寝る犬



写真4 威嚇する犬と威嚇し返すアルパカ

さて、かれらの生活は放牧地だけでは完結しない。うってかわって 3500m。日本でいえば富士山と同じくらいだが、緯度が低いため気候はずいぶん温暖で耕作も可能である。都市間をつなぐ幹線道路が通り、商店やら銀行やらレストランもあり、インフラも整い、もうすっかり「町」という印象を受ける。市場には他の場所から運ばれてきた色とりどりの果物も並ぶ。前述の 65 歳の女性の娘夫婦が拠点として生活しているのはこちらで、毛や肉の売買はもちろん、家畜を品評会に出したり（写真5）、競売に参加して大規模な家畜の転売さえも行う。

娘夫婦は基本的には町で暮し、普段の家畜の世話をしていないし、将来的にも 4800m の放牧地でずっと暮らす気はないらしい。山の上の暮らしは厳しい、とかれらは語る。寒いし、ガスコンロもないから料理はかまどでしなければならないし、シャ

ワーも浴びられない、と。アルパケーロ (alpaquero : アルパカを飼う人) の生活が知りたい、と言って調査してきた私はびっくりする。「じゃあ、あなた方はアルパケーロではないの？」思わず問うと、かれらは断言する。「私たちはアルパケーロだ。祖母も、母も、私も、放牧をしながら育った。」また、品評会の様子を事細かにノートに記録する私に、かれらは「アルパカが好きか？」と問うてくる。私がややとまどいしつつも、とにかく「好きだよ」と答えると、「私たちは君よりももっとアルパカが好きだ」と自信を持って言う。



写真5 品評会

標高 4800m と 3500m。この二つの場所の、生活のあまりの違いに私はくらくらする。しかし、かれらは当たり前のようにこれらの場所を行き来しながら暮らしている。家畜を飼うところ、家畜を売るところ、どちらも不可欠なのであろう。少なくとも今のところは。